

私と仮説実験授業

いとう まもる mamoru.itou@nifty.com <http://mamoru.la.coccan.jp/>

2016.8.27-28 たのしい障害児教育 夏の合宿研究会 at 科学の碑

今回の合宿研究会の案内の冒頭は、<「真理は実験で決める」・・・仮説実験授業に学びながら研究が始まった「たのしい障害児研究」の研究は・・・>という言葉から始まっています。そこで、私自身の、「仮説実験授業（以下、「仮説」と省略）に学びながら続けてきた教員生活」を、この研究会をきっかけに簡単に振り返ってみたいと思います。

私自身は、5年前に退職し、その後、5年間の非常勤教員の期間を経て今日に至っています。振り返ってみると、大学時代に板倉さんの本に出会い、全日制普通高校の理科担当教員として「仮説」に出会いました。しかし、当時、高等学校で「仮説」の授業書をそのまま実施する先生は少なかったという事もあり、板倉さん及び「仮説」の思想に学ぶことは多かったものの、その当時は、授業書をまるごと実施したことはなかったように記憶しています。

しかし、私が生まれ育った名古屋の高校の教師としての8年間（全日制普通高校3年・定時制工業高校5年）を経て、東京都の養護学校の教員（最初は肢体不自由児対象の養護学校高等部）になってからは、授業書をまるごと実施することが出来るようになりました。私自身、当時は、障害児のことはほとんど勉強しておらず、不安も大きかったのですが、それでも、**授業書に沿った授業を行うだけで、楽しい授業ができる**・・・それ以前勤めていた定時制の工業高校の生徒の多くは、基本的・気持ち的な部分で、教師不信・学校不信が背景にあって、生徒さんの大多数の間には、「勉強なんてそもそも面白くもなんともないもの・・・」という空気が漂っていて、精神的にはとても疲れるものでした。それに比べればとても楽しい・・・なんて楽ちんと…不遜にも思ったものでした。

とはいえ、その一方で、当時から通学してくる生徒さんの障害の重度重複化が指摘されていて、教科対応の授業ができる＝「仮説」の授業がそのままできるのは一部の生徒さんのみで、そんな生徒さん対象の授業の方が多かったので、「う・・・む、これは・・・」と思ったのも事実で、あれこれ障害児教育関係の本や資料を読み漁ったのもこの時期でした。

そんな資料の中でとりわけ異彩を放っていたのが、ある座談会での板倉さんの発言でした。この当時の私の思いを文章にまとめたものがあるので、よかったら読んでみてください。私の思いは別にしても、その中で板倉発言は今でも十分示唆に富んでいると思います（「おもいやりだけではいつかは破綻する」）。また、この記録がベースにもなって？その5年後には、板倉さんにも来ていただいて、仮説のメンバーを中心に「**障害児教育を根本的部分から考え直す研究会**」という会を開くことも出来ました。

しかし、この会終了後、同じ肢体不自由児対象の養護学校ではありますが、たまたま異動した学校で（知的障害を伴わない）重度肢体不自由児のケース担当になったという事もあり、理科の授業では授業書を使う傍ら、肢体不自由教育におけるICT活用の研究・実施にその活動の軸足を置くことになってしまいました。また、それから5年後には、ろう学校に異動し、それ以降10年間は、理科の授業を担当することもなく、まったくの教科情報の担当教員として過ごすことになってしまいました。

しかし、それからさらに10年が経過、もともとPC等が好きでもなかった私…障害児教育の原型は点字の世界＝盲教育にある？・・・高校から養護学校に移った時期、そんな考えが私の頭の中にもありました・・・かねてから希望していた盲学校の理科の授業で、再び、「仮説」の授業＝<「仮説」頼りの授業>を楽しめることになり、3年を経てめでたく？退職することになりました。(∇^)/

科学はどこがすばらしいのか：ちょっと長い引用から、「情報のデジタル化」について考える

「科学教育というのは＜科学のすばらしさ＞をおしえることを目標にしている」ということもできると思うんですけど、「科学のすばらしさを教える」というと、僕なんかとは違う考えをもった人が多いので、この際それをはっきりさせておきたいと思うんです。

科学のすばらしさというと、たいていの人には「そう、科学って本当にすばらしい」と賛成します。しかし「科学のすばらしさ」を言う時、たいていの人が頭にえがいているのは、「誰か頭のいい科学者のすばらしさ」ともう一つは「科学が発見した自然の美しさや、その科学にもとづく技術的発明のすばらしさ」のどちらかです。

でも、それじゃまったく不十分——いや、それだけでは科学というものはスバラシイのかイヤラシイのわからなくなってしまうと僕は思うんですよ。「その科学が自分のものとなりえた」ということにならないと、「自分にとって科学がすばらしい」とはいえないと思うんですね。

「科学を自分のものとしてできる、そういう＜自分自身のすばらしさ＞といったものが認められるようにならないと、それは科学のすばらしさとは言えないのじゃないかと思うわけです。そこで仮説実験授業では「科学を自分のものにしてきた、その自分のすばらしさを教えるために科学を教えよう」としてきたわけです。それが仮説実験授業の科学観、教育観の基礎となっているわけです。

「科学のすばらしさ」といったことは、これまでも重要視した人が沢山いました。また、その科学が明らかにした「自然の美しさ、すばらしさ」をいう人もいました。でも「自分自身のすばらしさをわからせてくれないようなものは科学のすばらしさじゃない」と言ってきた人はほとんどいないんですね。あと特権的な人たちで学歴にも自信のある人は「自分がわかった科学のすばらしさ」を言う人はいるけれど、普通の人でそんなこと言う人ほとんどいない。

でも、そういう風に言わないと、おかしなことになるんですよ。新聞記事なんかで「科学に未来がある」と書けば書くほど、ふつうの人には未来は暗く見えるようになってきたりするわけです。だってそうでしょう、**科学だけが進んでいくと、おれだけが取り残されていく——そんな感じじゃ、暗くなるのも当然**でしょ。オッカナイ未来ですよ。（板倉聖宣「自分のすばらしさ」を発見する授業」『たのしい授業』No. 9より）

ずいぶん以前の板倉さんの文章を引用しましたが、ここに（も）板倉さん・仮説実験授業の基本的考えが示されていると思います。そして、高校で教科・情報を教えるようになってしまった私自身の経験からいうと、科学一般に限らず、最近の情報化社会といわれる風潮についても同じようなことが言えるのではないかと考えています。

ところで、昨年、東京で初めて夏の全国大会が開かれるというので、私自身はここしばらくは参加していなかった全国大会ですが、「これも最後のご奉公？」と思い、資料係としてお手伝いさせて頂くことにしました。

この大会以前は、大会の資料一覧を作るにあたって、事前に資料作成者の方にパソコンのエクセル形式のファイルを送って頂き、大会初日の全体会までに資料一覧を作成するという膨大な作業…「仮説」の研究会のよき伝統＝現場の鮮明な問題意識をもとに大会直前まで資料作りをする人が大多数、それをもとに大会初日の全体会で分科会設定をするという他の研究会では考えられない荒業？・・・そのため、千葉の大会の資料係は大会初日はほとんどパソコンにつきっきり・・・資料係にとっては全体会にも分科会にも参加できないという悲惨な？作業が待っている・・・そんな状態だったそうです。

ところがネットワークを通じて色々情報を集めてみると、「冬の大会では佐賀の大会からグーグルフォームというネット上でデータを集約できるシステムを採用し、担当者の負担の大幅な軽減を図っていた」という情報を得、急きょ、予定を変更して、昨年の夏の大会でも同じ方法を採用することにしました。この間の経過を簡単にまとめると、以下のようになります。

- ・2015年以前：エクセルファイルをメールで担当者に送信→PCでマクロ処理して資料一覧を作成
- ・2015年：グーグルフォームによってネット集約し一覧表を作成
- ・2016年春のフェスティバル：参加者の集約をグーグルフォームを使って集約
- ・2016年：グーグルフォームによってネット集約+途中からメールでの受け付けも併用

先日、今度の冬の大会を計画している福嶋さんから再び資料係を担当してほしいとの依頼がありました。冬の大会では2013年の京都大会の資料集がデジタル化（CD化）してまとめられています。しかし、その一方で、今度の大会では授業書案が多く提出されそうという情報もあり、デジタル化による不正コピー（デジタル・データの方がコピーが簡単）等、著作権の侵害が心配されてもいます。

世はまさにデジタル化時代と言われますが、多くの人にとって「デジタル化？ なにそれ？」と思いつつも、「それでも情報化社会だからなあ。乗り遅れるのもまずいしなあ・・・(へへ)」といったイメージを持っている方が多いのも事実のように思います。

私たちが肢体不自由教育の現場でパソコン等の活用を始めたそもそものきっかけは、「障害児のことがわかる人はパソコンのことがわからない。その一方でパソコンのことがわかる人は障害児のことがわからない。そういった状況をなんとか変えたい」といった思いがあったからでした。「これからはIoT（Internet of Things, すべてのものがインターネットに接続する）時代だ」と言われていますが、パソコン大好き人間はいても、それが人々の暮らしにどのような影響を及ぼしているのかしっかり目を向けている人は少ないようにも思います。そういった状況の中で、情報のデジタル化が独り歩きしないよう（デジタル化＝無条件で善とは考えない）、着実に楽しく研究をすすめられればと思っています。

私の略歴：<http://mamoru.la.coocan.jp/nenpyo-.pdf>

・最低限保障としての授業書の存在

- ・板倉聖宣さんから学んだこと：おもいやりだけではいつかは破綻する

『たのしい授業』1988年11月号所収 <http://mamoru.cocolog-nifty.com/nikki/2011/10/post-7ce3.html>

「障害児教育を根本的部分から考え直す研究会」（1993.2.6-7）

- ・主に理科（物理）・数学担当教員として：名古屋の全日制普通高校3年・定時工業高校5年

→肢体不自由養護学校（15年）：肢体不自由教育におけるICT活用研究開始

ミニ授業書案 点字の発明と普及の歴史—障害者問題入門をかねて <http://http://mamoru.la.coocan.jp/tennji-an.html>

→ろう学校（10年：教科情報担当）：（ICTを活用した）「見える校内放送」等のシステム構築と実践

「ろう学校におけるITの活用について」<http://www.cec.or.jp/e2e/symp/17seikapdf/65.pdf>

→盲学校（3年）：中学部理科・視覚障害児教育におけるICT活用など担当 退職

→非常勤教員として：肢体不自由特別支援学校（4年）→盲学校（1年）

・2015年仮説実験授業研究会夏の全国大会資料係

→時間講師として盲学校へ（教科情報、週3時間担当）+知的特支（職能開発科：理科週2時間担当?）

退職ボランティアとして肢体不自由特別支援学校へ（PC等を使ったコミュニケーション・ツールのセットアップの協力）

ろう学校へ（放課後の自学自習のサポート）

・2017年仮説実験授業研究会冬の全国大会資料係（予定）：大会資料集のデジタル化を模索中